

着任当初の思いで



吉田賢司

私が帝京大学に赴任したのは、二〇〇七年四月であった。早いもので、もう五年の歳月がたとうとしている。今回、帝京大学を離れるにあたって、在職中のことを記す機会に恵まれたので、思いつくままに着任当初のことなどを振り返ってみたいと思う。

長年にわたり関西を活動の拠点としていた私にとつて、関東での新生活は希望と不安とが入り交じったものであった。何しろ、どこに何があるのかさっぱりわからない。とりあえず、赴任後の数週間は周囲の「探検」に時

間を費やした。新学期の開始前後における多忙な時期にもかかわらず、基本的な質問を連発する私に、他の先生方や職員の皆さんは根気よくつきあっていた。親切に対応してもらった。今では当たり前のようにお世話になっている各種事務の窓口、メディア・ライブラリーセンター、書店、売店、コピー機、掲示板などの位置と利用方法は、このときに教えてもらった。おかげで、新天地での生活を円滑にスタートさせることができた。

さて、このときの経験は思いがけないところで役に立った。それは、一年生の導入教育「ライフデザイン演習」においてである。「ライフデザイン演習」は、私の着任した年度にちょうど開講されたということもあり、他の専門科目に比べて未知の部分が多かった。ご存知のようにその内容の三本柱は、①アカデミックスキル、②キャリアデザイン、③キャンパスライフというものである。試行錯誤しつつも、①は専門の基礎能力となる読解・論述など、②はキャリアサポートセンターからの支援・情報によって、授業内容を組み立てることができたが、最後に残った③については何を扱うべきか悩んだ。

こうした中で、実際に新入生に会って話を聞いてみると、その多くが、新生活を始めた私と近い環境にあるということがわかった。考えてみれば、帝京大学に初めて接するという点で、教員も学生も関係なく、両者とも新しい環境での生活に「未知との遭遇」はつきものである。ここをスムーズに乗り切れるかどうかで、その後のモチベーションも変わってくる。先述したとおり、幸運にも私は周囲の方々の温かい支えのおかげで、この「壁」を乗り越えることができた。そこで、この経験を活かして③のキャンパスライフでは、新入生が四月からスタートダッシュできる手伝いをするつもりで取り組むことにした。

着任早々に右往左往したのは決して褒められた話ではないが、新入生と同じ目線に立って新生活に対する希望

と不安を共感できたことは幸いであつた。悪い意味での「慣れ」に陥らないように、帝京大学で育んだこうした初心の「思い」は、これからも大切にしていきたいと思つている。五年間、かけがえのない貴重な日々を過ごすことができたことに、心から感謝したい。